

Title	宣教師シドッティの日本への旅行
Sub Title	
Author	Tassinari, Renato
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.3 (1940. 12) ,p.197(577)- 203(583)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19401200-0197">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19401200-0197</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 宣教師シドツティの日本への旅行

タ  
シ  
ナ  
リ

イタリア人宣教師シドツティに就いては日本でも相當に知られてゐる。凡ての日本のキリシタン文獻は多少とも彼に關して記録してゐる。新井白石と彼との有名な問答は西洋紀聞によつて宏く知られ、ヨワン・シローテと云ふ日本流の呼び方で著名である。此處には一般に餘り知られてゐない、西洋の文書による彼の日本までの旅行に就いて話してみたい。何となれば日本上陸後の彼の行動に就いては多くの記録があり、相當詳しく調べられてゐるからである。

ジョアン・バツティスタ・シドツティは一六六八年イタリアのパレルモ市に生れた。ローマで學業を終へ、早くから教會の高い位置を占めてゐた。然し彼は若い時から日本宣敎の大きな希望を持つてゐたのである。

一六四〇年マカオから日本へ遣はされた使節團が首を斬られて以來、日本の門戸は固く閉された。然し司祭なくして日本に居る信者を思へば宣教師として此のやうな妨げにもかゝはらず、日本に上陸せん

とする試みが屢々繰り返へされた。

一六四二年、イエズス會宣教師ルビノの一行五人は薩摩の小島に上陸し捕へられて皆殺された。

翌年、マルクエスの一行は筑前に於いて捕へられ、長崎江戸と送られ禁錮せられた。

一六四七年、ドミニコ會員五人がマニラを出發したが嵐に遭つて吹き返へされた。

一六六二年、イタリア人司祭サッカーノは上陸後捕へられ、獄中で死んだらしい。

此の外にも渡航を企てた者も居るが、それに就いては上陸したこと丈はわかるが、それ以外のこととは永遠の謎である。

右の如き上陸の試みが絶へた頃シドゥッティは現はれる。彼は之等の困難を知つてゐた。然し日本宣教師を自分の使命と考へてゐた彼は自分の將來を捨て、母と兄との祝福の下に、一七〇三年の春の初めイタリアを後にした、支那へ行くトルノン司教と共にジェノアより上船してスペインのカデスを経、カナリア島でフランス船に乗りかへ、アフリカを一週して印度のポンディセリに着いたのはその年の十一月六日であつた。

次の年七月二十一日マドラスから上船九月にマニラに着いた。

彼のマニラ滞留は四年の長きに亙つた。日本に行く船がなかつたからである。此の四年間に於ける彼の行動は當地の宣教師アゴステイン・デ・マドリッドが教皇クレメンテ十一世に送つた報告の中にあり、

日本旅行記と題して貴重な文獻となつてゐる。(一七〇七年印刷さる)

シドッティはマニラに於いて大いに働いた。慈善事業を助け希教に従事した。病院内に寢起して病人の看護に當り、寄附金募集の爲めに奔走した。此の奮發と彼の徳は多くの人よりの尊敬となり聖人として目せられるに至つた。珍らしい奇蹟が彼にあつたやうに考へられた。彼は病院の擴張、神學校の建設の爲め、寄附を募つた時容易にそれを得ることが出来たのは彼の徳の結果である。彼は是の神學校を敎皇の名譽の爲めクレメンテの神學校と名付けた。

此の働きの間にも彼は日本渡航を忘れたのではなかつた。町には日本人が居た、それは風に遇つて流されて來た者、又は追放されて來た信者の子孫であつた。彼等の援助の下にイタリア以來持つて居る古い二冊の日本語研究書を以つて勉強を續けた。

日本への航海は完全に駄目であつたが彼はどうしても斷念することが出来なかつた。スペイン人は彼の強い決心に感心し、總督自ら先に立つて彼の爲に小さな船を造る金をと、のへて渡した、船長ミグエル・デ・エロリアゴは日本までの案内を引き受けた。

一七〇八年八月二十二日町の人々の感謝と涙の中に、シドッティはサンタ・トリニダード號に乗つて日本へ出發した。

航海は困難であつた。風は反對であつたし海は荒れてゐた、マニラ日本間二千キロを行くに六週間以

上を要したのである。

シドッティは船中の一日を大概祈の中に過した、病人を看病したり、日本語を勉強したりした。睡眠時間は極めて短かく、食物は極く少量だけとつた。嚴重な時間割を作り之を守つた。そして常に靜安であつた。天主のこと自分の旅行の目的に就いて默想してゐたのである。

遂に十月九日日本の島が見えた。先づ屋久島が、更に遠く嘗つて（一五四二年）スペイン人が最初の足跡を印した種子ヶ島が見えた。次の日屋久島の附近に日本の漁船を見付けた。小舟を下ろして數人の水夫とマニラから連れて來た未信者の日本人が乗り込み、漁師の船に近づき相談を初めたが、漁師達はそれを斷つた。では飲料水を分けてくれと頼んだ所、長崎へ行けと言つた。仕方がないので皆は親船に歸つた。シドッティは自分丈けで、もう一度交渉して見たいと思ひ小舟に乗つて追ひかけたがだめだつた。船に歸つてからは是非今日の中に上陸しなければならぬと決心して自分の部屋に入り靜かに長く祈つた。そして支度を初めた。色々の手紙を書いた。一本は教皇に宛て、書いてあり之は翌年ローマに到着した。

晩になつたので水夫と共に祈を唱へてから病人に最後の見舞をし、仕度を完了するために再び自分の部屋に戻つた。準備した荷物は極めて簡單であつた。ミサ聖祭に必要な道具、信心用のものと書籍數冊であつた。水夫達が上板に集つてゐると日本の着物を着、髪は日本風にとり上げ、武士のやうに刀をさ

したシドゥッティが現はれた。彼は落着いて微笑を含んでゐた。別れは感動すべきものであつた。全部の人の足に接吻した、黒人のボーイにさへした、そして彼等の祈を求めたのである。

下された船の中には八人の水夫と運轉士と船長とシドゥッティとが乗つた。小舟はすぐに暗の中に消へた。屋久の島に着いたが上陸には随分手間どつた。着陸すると直ちに天主に感謝し跪いて地に接吻した。久しく待つてゐた希望の土に接吻した。十月十日であつた。

スペイン人達は彼と共に山の中まで行つたが、別れて濱に歸つて見ると驚いたことには親船が見えない。小舟に乗つて數時間搜したが無駄だつた。然しシドゥッティは皆が無事に歸り得ることを豫言して慰めた。果して親船は再び現はれ全員無事に歸船し、風の都合が良かったので十月二十九日マニラに歸着した。

シドゥッティの其後の消息に就いては西洋では長い間知られなかつた。後になつて日本の文書とオランダ人ワレンティンの舊書によつて以後の事蹟が判明した。

長崎夜話草には次の如くシドゥッティの上陸に關して記して居る。

寶永の比にや羅媽國邪法の徒、呂宋島に來り居て、彼地の船に乗りて日本薩摩の國、夜久の島に着きて一人船よりおろし置きて、いつち行けん、しる人なし、此の一人日本の風俗を似せて月額を剃り、日本の衣服を着て、刀一腰をさし、初めは山中にかくれ居て、柚本きる山人、又は炭焼の翁



などに日本詞にて食物など乞ひて、その價に金子などらせれば、いとふしぎに思ひ、殊に實の日本人のさまにかはりたれば、其の山家の長に告げ、段々に聞き傳へぬれば、人みな怪しくおもひて終に國王のもとに聞へて吏役の士あまた、さし遣はし、めしとらへて長崎に送りやられぬ。其人物毛髪は黒くして紅毛の如くに赤からず、眼も紅毛人の目のさまにあらず、から日本の人とおなじ、鼻のすぐれて高きこそ同じからね。いたりや、らうま國の邪法の張本にて世界所々の國に邪宗すすめにめぐりありくものなるが、あまた有るが中に、おのれは日本に來れるなり、日本の詞にてころく自答へて通辭を要せずとかや、日本詞をさまざま書き付たる横文字の書一冊常に手をはなさず持て是をひらき見て應對せしと聞ゆ、おそろしき事にあらずや。此の異人則ち長崎より江戸へ送りつかはされ、獄屋に入おかれて、其後の事は知る人なし。

ワレンティンはシドッティの長崎訊問に就き立合つた通譯のオランダ人から聞いたことを次の如く記してゐる。

彼は數人に連れられ、手はうしろに縛られて入つて來た。脊は高く、瘡せて居り、青ざめて面長くなり、鼻高く髪黒く、日本風の頭は月額延びて壞れたまゝとなり、鬚も延び、日本の着物を着て首に大きな十字架をかけ、手に數珠を持ち、腋の下に二冊の本を抱へてゐた、話をするこゝも出來ない程疲れて居り、時々天の方に向つて口を動かしてゐた。

斯くの如く長崎に護送され訊問を受けたが、良い通事になかつたので要領を得ずに終つた。シドッティはイタリヤ語ラテン語片言まじりの日本語しか話さないのので、通譯になれたオランダ人も理解出来なかつた。

役人は處置に困つて江戸に注進して方針を尋ねたが丁度その時將軍綱吉が死んだので取りまぎれ、そのままにされてしまつた。一年たつた後江戸から命令が來てシドッティは江戸へ送られた。そこには將軍家宣から特に任命された新井白石が彼を待つてゐた。

江戸にあつた時の事情は詳しく西洋紀聞に出てゐる(岩波文庫二三五二)。宣告の後シドッティはキリシタン屋敷の牢屋(小石川區茗荷谷町)に入れられ一七一五年十一月十六日に死んだ。その死と墓に就いては未だ明でないが、私は此の頃此の問題に就いて研究してゐるから、モニユメンタ・ニツポニカ(上智大學出版)に近い中に發表するつもりである。